

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 8 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531197

研究課題名(和文)鑑賞の授業における構造主義モデルの再吟味と社会文化論的アプローチによる再構築

研究課題名(英文) Re-examination of the structuralism model and socio-cultural approach in the music appreciation class

研究代表者

小川 容子(Ogawa, Yoko)

岡山大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：20283963

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学生の「音楽鑑賞リテラシー力」向上のための教授方略の開発をおこない、教育現場の実態を踏まえた授業モデルの提案をおこなった。附属小学校での数回にわたる提案授業と検証授業をおこないながら、現代音楽を用いた鑑賞授業の具体的な指導計画の構築と提案をした。授業の前後のプレテスト・ポストテストの結果、プレテストでは、現代音楽の特徴に気づく子どもたちは半数以下であるが、繰り返しがどのように変化・発展しているのかを丁寧に聴き比べ理解を深めることで、現代音楽の深部の特徴に気づき、ポストテストでは、現代音楽の中で使われている作曲家の匠のワザに気づく子どもたちが8割にのぼることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study was conducted to propose a child-centered model in order to improve music literacy of elementary school children. We examined the roles of effective instruction, teaching method, and small-group activity, focusing on the contemporary music. In this study, we conducted pretest-posttests, questionnaires, and semi-structured interviews. In the pretests, less than half of children were able to identify characteristics of contemporary music. During the study, the teacher set up situations in which the students were required to work and think together in small groups during every lesson. During the 3 years of study, students' abilities to apply a deeper thinking style increased and the proportion of children who were able to recognize the specific skill at a professional composer rose to 80%. It was also found that the effective strategies, including repetition listening, comparing the true and false music pieces resulted in the rise of listening literacy of children.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：音楽鑑賞リテラシー力 授業モデル 現代音楽 授業分析

1. 研究開始当初の背景

(1)音楽授業の中でどのように鑑賞活動を展開・充実させるかという問いは、多くの音楽教育者・哲学者たちが追究してきた根源的なテーマであり、長年にわたる論争を引き起こしてきた。この論争はもともと、鑑賞の役割を重視したB.Reimerらの「構造主義モデル」に端を発している。Reimerは、楽曲よりもその構造に焦点を当て、音楽の要素を越えて芸術全般に共通する「概念」を抽出し、多様な様式の音楽や美術を統合的に学習させるという科学概念を模したカリキュラム改革を提唱しつつ、音楽教科書(シルバーバード社)の編纂へと結実させた。しかしこれに対して、作曲を軸にすえた包括的な学習をすべきという批判(Regelski)や、鑑賞は副次的な活動であり演奏を優先すべきという反論(Elliott)など、さまざまな議論が40年以上にわたって繰り返され、近年ようやく、Morrisonらによって「創造的行為としての鑑賞」という新たな局面を迎えている。言い換えれば、欧米における鑑賞活動に関する議論は、表現か鑑賞かという議論から、表現につながる鑑賞の専門性を体系的に教えるためにどうすればよいかという議論へと、少しずつ流れが変わってきていると言えるだろう。

(2)一方、我が国においてこの一連の論争は、鑑賞の理論的側面である美学や哲学の課題であるとして、教育現場における実践面の課題とはほとんど結びつけられてこなかった。最近、小・中学校の教員を中心に実践研究がおこなわれはじめたところであるが、対象クラス全体としての鑑賞活動のあり方や、教材・音源を含めた具体的なカリキュラムの検討など「教授方略」を開発する研究は、その途にたばかりである。

2. 研究の目的

(1)本研究では、楽曲を対象としたカリキュラムとの比較を通して「構造主義モデル」の意義を検討すると共に、「社会文化論的アプローチ」を援用した生徒参加型の鑑賞活動を主体とする教授方略を考案・提案する。児童生徒に焦点をあてた参加型の鑑賞活動では、Laveらの「正統的周辺参加」や、Engeströmの「活動理論」の考え方をベースに、協同場面における子ども、子ども、子ども、教師間の複層的やりとりや、学級全体の関心・意欲・態度の深化、ひいては音楽鑑賞リテラシー力の向上を目指す。

(2)具体的な授業モデルの提案にあたっては、附属小・中学校並びに公立小学校(調査協力校)での授業実践をおこないながら、次の二つの実現を目指す。

年間を通して鑑賞活動を実施するためのカリキュラムづくりと、子どもたちの意欲・関心の高まりと学力向上との有機的な関連を可視化できるような工夫をする。

これまであまり積極的に扱われてこなかった現代音楽作品を用いた鑑賞授業を実施するにあたり、作曲家の技法を模倣しながら創作と鑑賞活動の往還を通して、「本物作品」の神髄を明らかにする。作曲家の匠の技に迫りながら、子どもたちの現代音楽への興味・関心の深化をめざす。

3. 研究の方法

音楽鑑賞リテラシー力向上のための教授方略を提案するにあたって、授業実践者、研究者、研究協力者との連携をおこないながら、次の手順で研究を進めた。

(1)社会文化的アプローチを援用しながら、協同学習場面における仲間同士のピア・ティーチングやピア・モデリング、足場作りの効果を検討する。

(2)学びの質的・量的変化を測定する質問紙項目の作成と、学習のプロセスにおける動的な変化をとらえる手だてを検討する。

(3)デザインベース研究の手法に則り、授業モデルの開発と実践を繰り返しながら、教師の指導助言やグループ活動の組み込み方を検討する。音楽鑑賞リテラシー力の土台部分：作品のモチーフがどのように発展しているか、テーマがどのように繰り返し、発展・変化しているか、その当時の芸術様式と関連があるのかといったことを学ばせるための方略を検討する。

(4)音楽鑑賞リテラシー力の測定・評価にあたっては、詳細な授業観察をおこない、フィールドノートに文字記録として採取する。子ども達のつぶやき等も収集し、個人内思考と共同思考の関連について分析する。

(5)継続的な授業実践の前後で、プレテスト・ポストテストを実施すると同時に、質問紙調査や種々の音楽学力テストを並行しておこない、子どもたちの音楽鑑賞リテラシー力の深化を客観的に測定する。

4. 研究成果

(1) B.Reimerが提唱・編纂した音楽教科書の収集(米国)をはじめ、多様な様式の音楽や美術を統合的に学習させるため科学概念を模したカリキュラムづくりに関連する国内外の資料収集をおこなった。あわせて、シルバーバード社の教科書を用いて授業を実践して

いた教師のインタビューを通して、指導のしやすさ、子どもたちの学力等に関する聞き取りをおこなった。

(2)鳥取県内の小学校を対象に実施したアンケート調査によって鑑賞活動の実態を明らかにしつつ、鳥取大学附属小学校の協力のもと、鑑賞作品の選定とその聴かせ方や指導言について協議をおこない、年間のカリキュラムづくりに関する検討を重ねた。その結果、授業の開始直後に5分～10分程度の鑑賞活動を毎回とり入れ、その都度「ワークシート」を教師と子ども間でやりとりすることにより、継続的な鑑賞指導の定着を実現することができた。作成した「ワークシート」には、子どもたち自身の気づきを記入させると共に、教師がそれに対するコメントを書き込み、次の授業で子どもたち全員に指導・共有するという工夫をおこなった。一連の鑑賞活動を繰り返す中で、子どもたち一人ひとりが持つ内的な領域固有の知識が少しずつ共有されていくことが確かめられ、音楽語彙の定着と増加の現象を確認することができた。しかし、作品のモチーフがどのように発展しているか、テーマがどのように繰り返され、発展・変化しているのか、その当時の芸術様式とどのような関連があるのかといった構造分析を含む鑑賞活動の深部へと発展させるためには、ワークシートだけでは限界があることが指摘された(図1)。

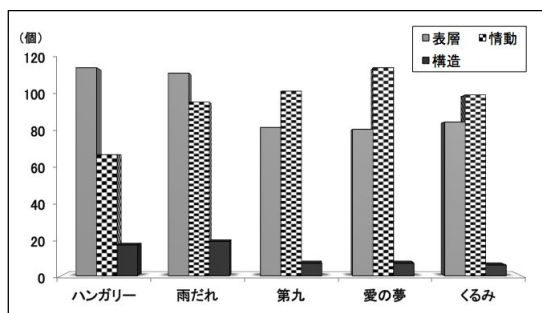


図1 楽曲別に見た児童の気づき

(3)研究代表者の異動に伴い、岡山大学附属小・中学校と大学(音楽講座)との協力体制を新しく作り上げた。デザインベース研究の手法に則りながら、大学院生4名による模擬授業を組み込み、附属小学校での授業実践を積み重ねると共に大学教員と現場教員との連携を深めていった。授業観察にあたっては、複数のVTRとMDレコーダーを使用して、子どもたちの活動の様子を映像及び声データとして収集し、グループ活動を中心に授業分析をおこなった。

以下の図2は、一年間に及ぶ観察授業の最後に、授業実践者として授業モデルを提案し

た大学院生たちの自己評価結果をまとめたものである。授業者によるバラツキは認められるものの、「教員による授業介入の効果」(設問1)や「授業を通して新しい提案が出来たかどうか」(設問3)に関しては、概ね高い評価が得られた。

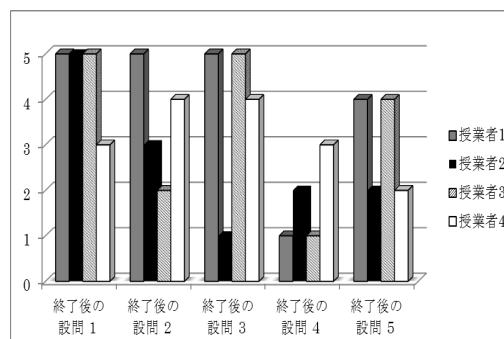


図2 授業終了後の設問に対する自己評価(授業者別)

(4)教育現場でなかなか取り上げられない現代音楽作品を扱った鑑賞授業を継続的に実施しながら、子どもたちの鑑賞リテラシー力の向上を測定した。プレテストとポストテストを実施し、生徒一人ひとりの変容を明らかにすると共に、グループでの討論の様子を詳細に分析することで学級全体としての「学びの深化」を具体化した。授業では、あえて手法だけを模した「偽物」に着目させることで「本物と偽物」の違いは何か、作曲家の匠の技がどのように音として表現されているのかをクラス全体で討論しながら、個々の学びへとつなげた。

次の三つの図はプレテスト(1回目)とポストテスト(2回目)で生徒の判断がどのように変化したか、対象楽曲別の結果を抜粋して示したものである。図に示したようにプレテストでは、聞こえてきた偽物の音楽作品を「偽物」と判断した生徒の1.5倍の生徒たちが「本物」と判断しているが、授業後のポストテストではその判断が逆転していること、さらにその確からしさに強い確信をもっていること(60~80%)、その理由が音楽構造に則っていることがわかる。

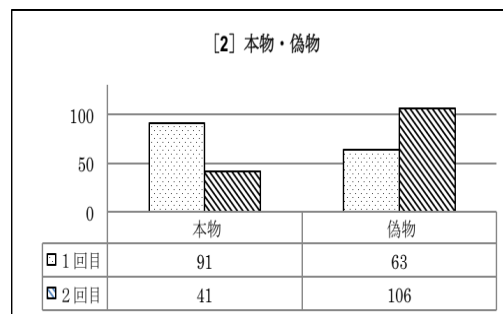


図3 対象楽曲に対する生徒の本物・偽物判断(プレテストvs.ポストテスト)

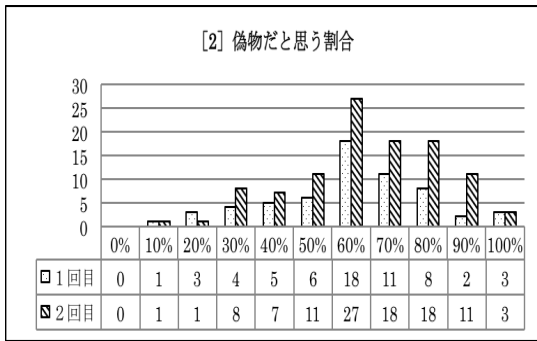


図4 対象楽曲に対する生徒の判断の確からしさ
(プレテストvs.ポストテスト)

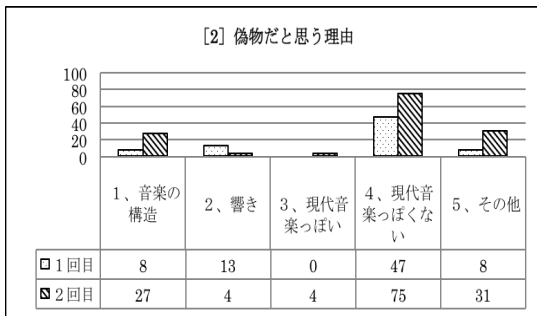


図5 対象楽曲に対する生徒の判断の理由
(プレテストvs.ポストテスト)

分析結果からは、プレテストの段階で現代音楽の表面的な特徴に気づく子どもたちは半数以下であるが、授業の中で、現代音楽の作曲技法の一つ：音型の繰り返しがどのように変化・発展しているのかを丁寧に聴き比べ、自ら創作をおこなって理解を実感することで、現代音楽の深部の特徴に気づくこと、ポストテストの段階では、現代音楽の表面的な特徴はもちろん、その中で使われている匠の技に気づく子どもたちが、全体として8割にのぼることが明らかになった。

(5) 学びの質的・量的な変化を測定するための質問紙項目は連携校の音楽教員と相談しながら、複数回の試行錯誤を経て以下の項目がふさわしいと判断された。

- ・音楽鑑賞は好き / 嫌いですか (5段階)。
- ・どのようなところが好き / 嫌いですか。
- ・友達に薦めたい楽曲はありますか。
- ・それはどのような曲ですか。
- ・どのような箇所を聴いてほしいですか (複数回答)。
- ・学校で習った曲の中で家族の人に聴いてほしい曲はありますか。
- ・それは何の曲ですか (複数回答)。
- ・なぜ聴いてほしいと思ったのですか。
- ・これからどのような曲を聴きたいですか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

早川倫子・小川容子、授業実践を通じた学生・指導者・研究者の学びと意識の変容-音楽授業におけるデザインベース研究の導入-査読有り、音楽教育実践ジャーナル(印刷中)

〔学会発表〕(計 4 件)

小川容子・仙田真帆、「小学校中学年児童における音楽鑑賞の熟達化」日本音楽教育学会第42回大会2011年10月23日、奈良教育大学

仙田真帆・小川容子、「他者との『共有』による音楽鑑賞の熟達化-小学校高学年児童における調査を中心に-」日本音楽教育学会第43回大会、2012年9月13日、東京音楽大学

小田原祐子・小川容子、「音楽鑑賞で求められる本物を探る力-ミニマル・ミュージックを題材として-」日本音楽教育学会第44回大会、2013年10月13日、弘前大学

仙田真帆・小川容子、「『音楽づくり』を通じた音楽鑑賞の熟達化-小学校高学年児童を対象とした授業実践・調査を通して-」日本音楽教育学会第44回大会、2013年10月13日、弘前大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

小川 容子 (OGAWA, Yoko)
岡山大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：20283963

(2)研究分担者

安達 真由美 (ADACHI, Mayumi)
北海道大学・文学研究科・教授
研究者番号：30301823

(3)連携研究者

()

研究者番号：